

青梅市文化財ニュース

第 1 5 8 号

平成12年12月31日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel0428-23-6859)

ニホンザルの進出

昨年10月25日、日向和田の和田橋の上で1頭のニホンザルを見かけた。「とうとうここまでやってきたか。これから大変だな。」というのがその時の印象だった。

西多摩のニホンザルは、大きく奥多摩グループと檜原グループに分かれている。奥多摩グループは、大丹波川以西の奥多摩左岸を行動圏としていて、青梅市では稀に離れ猿を見かける程度であった。1988～89年頃から多摩川を渡って右岸に進出し、更に東へと行動圏を伸ばすようになった。95～96年には、御岳から柚木町にかけて群れの移動が見られ、行く先々で柿の実を食べたり、サツマイモ・カボチャ・ナス・キュウリ等畑の作物に被害を及ぼし話題となったのも記憶に新しい。

サルが里に下りてくるようになったのは、山がスギとヒノキの林になって餌がなくなったからだという人がいる。確かに、戦後の拡大造林の政策で、広葉樹林が切られて人工林に変わり、サルの食料となるような木の実をつける木が少なくなったことも一因ではある。しかし、それ以上に人の生活が変わったことが大きな原因になっている。過疎と高齢化が猿害を大きくしている。

サルに限らず、どの動物にとっても、餌が危険がなく楽に採れればそれに越したことはない。サルにとって里の柿の実や畑の作物は魅力はあっても、畑にいつも人の姿があり放し飼いの犬がいる里は、恐くて近づけない場所であったに違いない。

ところが、人間社会の変化で里の雰囲気が変わり、サルにとって山で食料を探すよりも、里で人間が作ったものを頂戴してくる方がはるかに手軽な状況ができてしまった。里に怖さがなくなったのだ。

こうして奥多摩グループのサルは、青梅市西域へと行動範囲を広げてきている。「サルを見た」といって喜べる話ではない。人間とサルの関係のバランスが崩れてきていることの現れと考えるべきだろう。猿害なく人とサルが共存していける関係の構築は、大変な作業だが、青梅市でもこの課題に正面から向き合っていかなばならぬ時代に入ったのであろう。

(文責 久保田 繁男)

・ 青梅市教育委員会発行新書籍のご案内

青梅市史史料第50号 『川口家石灰関連文書（下）』 頒価 1,800円

郷土博物館、教育センターにて販売しております。

また、『川口家石灰関連文書（上）』（青梅市史料集第49号）も頒価1,800円で販売しております。